町村の施策事例集Ⅲ

全国町村会

魅力あふる町村を
実現するための
様々な取り組み

はじめに

全国の町村は、それぞれの地域が自主的、主体的に地域の特性を最大限活かしながら、創造的なまちづくりに取り組んでいます。

「町村の施策事例集」は、こうした各町村が取り組んでいる特色ある地域づくり53事例を紹介しております。それぞれの事例は、全国町村会の機関誌「町村週報」に現地レポートとして掲載したものであり、現場の町村職員等に施策の成立に至るまでの経緯や苦心談、今後の課題と展望などをご執筆いただいたものです。

各位におかれましては、是非ともご一読頂き、町村の地域活性化に向けた真摯な取組にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、本書の刊行にあたり、多大のご協力をいただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成26年2月

全国町村会長
藤原 忠彦

目次

北海道 厚沢部町　過疎だからこそできる！　町民が主体のまちづくり
―「素敵な過疎の町」への挑戦―　1

北海道 新十津川町　歴史に感謝　未来へはばたく　元気あふれるまちづくり　5

北海道 音威子府村　夢を語れる学校
―人口※905人、村の地域力、北海道おといねっぷ美術工芸高等学校―　9

北海道 初山別村　この村であなたの〝星〟を見つけてください
―マイスターズ登録者※8、538人に―　13

北海道 白老町　食材王国しらおい誇りある故郷づくり　17

北海道 安平町　「自然・利便性・話題と魅力は多い町の課題」
―移住・定住化促進による活気あるまちづくりを目指して―　21

青森県 七戸町　潤いと彩りあふれる田園文化都市を目指した町づくり
―東北新幹線全線開業を迎えて―　25

青森県 おいらせ町　奥入瀬川の恵みと笑顔あふれるまち
―私たちのまち私たちの手で満足度七十％　納得度百％のまちづくり―　29

青森県 東通村　東通村の教育改革　「教育環境デザインひがしどおり21」の挑戦　32

宮城県 加美町　「食の文化祭」で地域の食文化を掘り起こす　36

秋田県 三種町　豊かな自然、大地の恵み、心のふれ合う協働のまち
―長寿の種、福禄の種、楽の種を語源とする三種川のように―　40

秋田県 五城目町　思いやりと活力に満ちたふるさとの創生　自然にやさしく、人健やかにしてやすらぎ、産業が息づき、明るく文化の香り高い風土の形成と人々が交流する「ふるさと五城目町」をめざして　44

福島県 磐梯町　「温もりと活力ある　まちづくり」
―情報と人・もの・自然・文化に出会う会津嶺の里―　48

茨城県 五霞町 「小さくても、魅力と活力にあふれるまちづくりを目指して」 52
栃木県 那珂川町 豊かな自然と文化にはぐくまれ　やさしさと活力に満ちたまちづくり 56
群馬県 上野村 Uターン対策事業で、自立する村づくりを目指す 61
群馬県 嬬恋村 「人と自然 やすらぎと活力のある 村づくり」 ―さわやかな高原の村〝つまごい〟の明るい未来をめざして― 65
群馬県 草津町 景観に配慮した魅力ある町づくり 草津町特別編 草津町の国際交流行動 69
埼玉県 毛呂山町 ICTがもたらす家庭教育の革新 ―動画サイト「もろやま 親子で学ぶ基礎学習」を公開― 75
埼玉県 ときがわ町 「木」をキーワードに、都市と農村の交流で町の活性化を ―植えて育てる林業から、伐採し、活用し、植える林業へ― 79
千葉県 酒々井町 人　自然　歴史が調和した活力あふれるまちづくり ―住民満足度の向上へ― 83
東京都 小笠原村 世界自然遺産推薦地 88
神奈川県 葉山町 ゼロ・ウェイストへの第一歩 ―住民協働と半減袋でごみ半減へ― 92
山梨県 市川三郷町 「おらが町のPR下手」解消への第一歩 96
福井県 池田町 『百匠一品・あたりまえがふつうにあるまち』を目指して！ 100
静岡県 長泉町 笑顔があふれるまち ながいずみ ―子どもが輝き 子育てが楽しい 心ふれあうまちをめざして― 104

Contents

目次

愛知県 東栄町　現代ゆいの提唱 ―上下流の協働で再生する水源の里― 108

三重県 多気町　高校生レストラン「まごの店」で地域活性化！ 111

三重県 玉城町　「明るく・元気で・長生き」できる町を目指して！ ―ICTを利用した安心・元気な町づくり― 114

滋賀県 愛荘町　消えゆく文化を保存活用し、地域の魅力に ―町の「地域遺産」を未来へ― 119

京都府 伊根町　日本で最も海に近い生活のあるまち「ふなやん」の故郷から 123

大阪府 能勢町　人口12千人の都市近郊型のまちづくり ―何もないという贅沢― 126

兵庫県 佐用町　「絆」を大切にした支えあい、助けあうまちづくり 130

奈良県 広陵町　人にやさしい　人がやさしい　元気な町をめざして 134

和歌山県 かつらぎ町　緑に囲まれた潤いと安らぎのふるさとづくり ―定住支援と住民が参画する協働のまちづくりの推進― 138

和歌山県 北山村　〝小さな村だからこそ出来ることがある〟 伝統技術・地場特産物・ICT・環境保全・教育の5本柱で地域づくり 142

鳥取県 北栄町　風車と名探偵コナンに会える町　〝人と自然が共生し、確かな豊かさを実感するまちづくり〟 146

島根県 飯南町　目指すは「飯南ブランド」 150

島根県 邑南町　「A級グルメ」と「日本一の子育て村」の推進により雇用の創出と定住人口、観光交流人口の増加を目指す 154

島根県 **海士町**
〝人づくり〟からの〝まちづくり〟
―教育の魅力で全国から人を呼ぶ―
159

岡山県 **奈義町**
小さいからこそできる！　きめ細やかなまちづくり
―単独町政を歩む町の挑戦―
163

岡山県 **美咲町**
「黄福定食」から〝黄福〟なまちづくりへ
MISAKI YELLOW HAPPY PROJECT
167

山口県 **周防大島町**
賑わいの創出・観光交流人口100万人を目指して
―瀬戸内のハワイ周防大島町へ都会の子供たちの修学旅行―
171

香川県 **まんのう町**
元気まんまんまんのう町　改革・協働・輝きの町
175

愛媛県 **松野町**
この森に学びこの森に遊びてあめつちの心に近づかむ
―地域資源を活かしたまちづくりで個性を磨く！―
179

愛媛県 **鬼北町**
森がすくすく、川がいきいき、人が元気
―自然満足都市　きほく―
183

福岡県 **東峰村**
自然・文化を生かした交流による活力と心豊かな暮らしのある村
―山里の「智」と「技」から創造する持続可能なむらづくり―
187

佐賀県 **有田町**
「食」と「器」でまちづくり・ひとづくり
191

熊本県 **嘉島町**
大豆焼酎「嘉島」誕生　―嘉島大豆をブランド化―
195

鹿児島県 **さつま町**
個性と知恵と協働で創造する豊かなまちづくり
―自然と文化と温泉のまち―
199

鹿児島県 **南種子町**
島への移住支援に求められること
―サポセンの取組―
203

沖縄県 **伊江村**
「夕日とロマンのフラワーアイランド」
―自主自立の村づくりを目指す島―
208

※一部文中の日付・数値、記述につきましては、原則として「町村週報」掲載時点のものですが、最新のデータに修正した箇所があります。

Contents

過疎だからこそできる！町民が主体のまちづくり

―「素敵な過疎の町」への挑戦―

はじめに

北海道の南部、渡島半島の日本海側に位置する厚沢部町は、総面積460・42㎢、東西約29㎞、南北約27㎞の広がりをもち、町域は、扇形をなしています。町の中央には、国道227号が東西に延び、車では、函館から約1時間15分、札幌からは約4時間30分の位置にあります。

また、面積の8割以上を森林が占め、ヒバ（ヒノキアスナロ）や五葉松の北限の地であるほか、トドマツの南限地でもあり、南北の植物の両方が自生する学術的にも貴重な地域となっています。加えて、鶉川や安野呂川をはじめ多くの支流を集め、田園地帯を流れる厚沢部川は、水量も豊かで鮎の泳ぐ良好な環境が保たれており、大地に潤いを与えています。

しかしながら、町では、人口減少と同時に急速な高齢化の進行が地域振興上の課題となっています。この課題克服のため、「素敵な過疎のまちづくり基本条例」を制定し、町民が主体となり、「住んでみたい」「住んでよかった」「いつまでも住み続けたい」と思える安全で安心して暮らせる「素敵な過疎のまち」をスローガンに掲げ、過疎地ならではの「つながり」を武器に、町の魅力を高め、移住者と厚沢部ファンの獲得に繋げていく移住交流施策等に積極的に取り組んでいます。

「素敵な過疎づくり株式会社」における移住交流コンシェルジュ業務

田舎暮らしには憧れるけど、移住に踏み切るのは、なかなか勇気がいるものです。そこで、平成21年9月には素敵な過疎づくり株式会社を設立し、移住体験の情報や、町の住民の様子、暮らしに役立つ情報などを、専用ホームページ「ちょっと暮らしナビ」によ

まちの観光大使
「おらいも君ファミリー」

▲ 水車公園

北海道 厚沢部町 あっさぶちょう

趣味や生きがいと共に暮らせる「アトリエ」や土間のある家Ａ棟

自然と共に心豊かに暮らす場所、テラス＆デッキで家族団欒Ｂ棟

広大な緑のロケーションとゆとりの和空間に溢れる住宅Ｃ棟

原野に立つ存在感のある住宅、家庭菜園のスペースも充実しているＤ棟

り、町民が参加した動画といったより分かりやすい形で提供しています。

そして、平成22年２月に４棟のちょっと暮らし専用住宅が建築され、一軒家をまるごと貸し切って、まるで我が家のように田舎暮らしがお試しできるうれしいプランが厚沢部町に誕生しました。

実際に「ちょっと暮らし」を体験した方の中には、町民との交流等により、厚沢部の魅力を十分に感じ、リピーターとなっている方もいます。

交流事業の「九州女子大学アウトキャンパススタディ」においては、学生がホームステイをすることで、そこで課題を発見し、発表・解決案を提起するといった取り組みを行っています。

また、都会の小中学生が、恵まれた自然環境、農村景観の中、地球規模で環境を学び、大人になる準備としての社会学習や、プチ寮生活で学ぶ人間関係、地元の人たちとの交流等を実施する「夏休み・あっさぶ町大冒険」を企画実行しています。

民間企業・団体と連携し、自然・農業体験などのコンテンツ開発や特産品のＰＲ等を実施し、「根強い厚沢部ファン」の獲得によって、地域経済の活性化を図っています。

メークイン発祥の地における巨大コロッケ

初夏を迎えると厚沢部町の大地は、メークインの花々に彩られます。厚沢部町の風物詩ともいえる広大なメークイン畑ですが、はじめてメークインが試作されたのは大正14年のことです。その後研究が進められるとともに、厚沢部町はメークインの適地として栽培が広がり、全国でも有数の産地となりました。メークイン発祥の地として古くから農業の営みが続けられてきた厚沢部町では、現在も、農業を基幹産業として安全で良質な農産物づくりに取り組んでいます。

毎年、７月はイベントが真っ盛りです。中でもユニークな試みで楽しませる「あっさぶふるさと夏まつり」では、町内の職人が結集し、特産のメークインを使用した、巨大コロッケを製作しています。平成22年は、メークイン４００kgを使い、直径３・08ｍの世界最大のコロッケの製作に成功しました。クレーンで吊り上げ、９００ℓの油で揚げる様子は圧巻です。

▲ 2010年、世界最大のコロッケを制作！

森林資源の有効活用

厚沢部川を中心に森林伐採や川鮭漁などにより拓かれ集落が形成された厚沢部町ですが、林業はその後も豊かな森林資源を活かしながら、農業とともに町の重要な産業となっています。

五葉松の自生地一帯は明治41年に伐採が禁止されて以来、保護が続けられていますが、昔から厚沢部町では森林の持つ機能に対する意識が高く、水土保全、森林と人との共生、資源の循

環利用など、樹木や森自体をまちづくりに活かす取り組みを展開しています。

また、未利用森林資源の有効活用のため、クリーンエネルギーとして注目を浴びている「木質ペレット」の普及・利活用に、地元業者・関係機関が一体となって取り組んでいます。

豊かで貴重な森の樹々がやさしく語りかけてくれる「土橋自然観察教育林（レクの森）」は、森林と身近にふれあえる空間として訪れる人々に自然の素晴らしさを伝えています。

また、管内初のオートキャンプ場として平成11年にオープンし、ファミリーで気軽にキャンプを楽しめ、道南を代表するアウトドアの拠点として親しまれているのが「鶉ダムオートキャンプ場（ハチャムの森）」です。

厚沢部町の自然体験空間として思う存分に森の魅力を満喫できるのが「レクの森」と「ハチャムの森」。清らかな自然の素晴らしさに、肌で触れてみてください。

◀レクの森：シラカバ並木

▼ハチャムの森

本格芋焼酎「喜多里」

厚沢部のメークイン栽培技術に着目した札幌酒精工業㈱が、平成15年から焼酎用のさつまいも「黄金千貫」の試験栽培に着手し、契約農家と共同で研究を重ねた結果、「北海道では不可能」といわれたさつまいもの本格栽培を実現しました。

また、町民がふだん口にしている水道水は、雨や雪が地下に浸透した湧水（わき水）を水源としています。この湧水は、水道法で定められた滅菌処理のみが施され、水道水として最も良質な状態で一般家庭に届けられます。水源からの取水や水質、各地区への配水など、水道に係わるあらゆる情報は、専用回線を通じ24時間体制で管理されており、徹底した安全確保が図られています。

このように厚沢部町のきれいな水や、さつまいも栽培を可能にした温暖な気候が、焼酎造りに適していたことから、町内鶉に札幌酒精工業㈱厚沢部工場を建設しました。

初の北海道産本格芋焼酎（乙類）は、やわらかな芋の香り漂うさらりとした飲み口で、町内はもとより、道内各地で人気を博しています。

◀初の北海道産本格焼酎「喜多里」

時代の息吹を今に伝えて・史跡館城跡の保存整備

明治元年（1868）8月下旬、松前藩は根拠地を福山（現松前町）から厚沢部の「館」に移すことを決断します。

築城作業は、突貫工事で進められ、10月下旬頃には一応の完成をみたようです。11月3日には藩主徳広公が福山城から館城へ移動しました。

その頃、森町鷲ノ木に上陸した旧幕府軍は、すでに五稜郭を占拠し、さらに福山城にも激しい攻撃を加え落城させました。

11月15日、旧幕府軍の館城攻撃が開始され、今井興之丞、三上超順ら松前藩重臣が相次いで戦死する激しい戦いの末、館城は、落城しました。

その後、館城周辺は、農地として利用されてきましたが、北海道における幕末維新期の情勢や、松前氏の歴史を知る上で重要、と判断され、平成14年に国の史跡指定を受けました。平成23年町では、史跡発掘事業を進めています。

◀館城跡

伝統芸能「鹿子舞」

今から約5百年前、厚沢部周辺の山々は良質なヒバの森となっていました。室町時代の終わり頃から江戸時代の初めにかけて、ヒバの森を目指して東北地方から多くの杣夫が訪れたといわれています。延宝6年（1678）、江差に檜山番所が設置されるとさらに多くの杣夫達が厚沢部の山々に入り込み、定住するようになりました。大自然を相手に仕事をする杣夫達は、鹿を山の神として崇拝し、鹿をモチーフにした芸能「鹿子舞」を創りあげました。鹿子舞は、東北地方北部と北海道南西部に広く分布し、杣夫達の交流の痕跡を今に残しています。

▲ 伝統芸能「鹿子舞」

厚沢部町にはかつて6つの鹿子舞が伝えられていましたが、現在では、4地区で保存会が結成され、伝承活動が続けられています。厚沢部の成り立ちをよく示す伝統芸能として、平成17年に町の無形民俗文化財に指定されています。

まちの観光大使「おらいも君ファミリー」

おらいも君は、昭和59年5月11日厚沢部町の地に産声を上げ、以来、厚沢部町のイメージキャラクターとして、活躍しています。

そもそもは厚沢部町を通る国道227号沿いのメークイン・ロードの看板に描かれていたおらいも君ですが、その姿がとてもかわいいと、当時の町活性化集団〝明日の厚沢部を考える会〟が、ネーミングの公募を実施。昭和60年2月7日に〝おらいも君〟と正式に命名されたものです。

その後、厚沢部町のPR担当に就任し、ポスターやTシャツ・看板・包装紙等に登場し、平成3年には、着ぐるみとなって登場し、各イベント等で活躍しています。

妻のさつきさん、娘のポテコちゃんとともに、これからも町をPRし、盛り上げていきます。

地域で共に支え合う福祉社会を目指して

全国的に高齢社会を迎えているなか、福祉の果たす役割はますます高くなってきています。

厚沢部町では、高齢者の保健福祉サービスの着実な推進を目的とした老人保健福祉計画・介護保険事業計画「あっさぶひまわりプラン」に基づき、住む人に「豊かな田舎暮らし」をサポートし、細やかなこころづかいを大切にしたサービスを提供しています。訪問リハビリや転倒予防教室、痴呆予防・介護教室、生きがいデイサービスなど介護予防事業の充実を図っているほか、健康づくりや生きがいづくり事業を展開し、在宅生活を快適に過ごす上での生活支援事業の推進にも努めています。

平成18年10月には、保健福祉総合センター「あゆみ」がオープンし、地域包括支援センターや訪問看護ステーション、機能回復トレーニングコーナー、リハビリ教室などに利用する多目的ホールなど充実した設備を有しています。この施設を保健福祉活動の拠点として、赤ちゃんからお年寄りまで健康で楽しく過ごせるまちづくりを推進しています。

おわりに

近年の本町を取り巻く社会経済情勢は、人口減少と少子高齢化の急速な進行等、大きく変化しています。

また、地方分権の一層の推進と国家財政の窮迫に伴い、町の行財政運営も一層厳しさが加わるなど、大きな転換期を迎えており、これまで以上に行財政改革を進め、自立できるまちづくりに向けた積極的な施策の展開が求められています。

厚沢部町は、町民と一体となって素敵な過疎のまちを目指し、これらの自然や歴史・伝統文化を保全するとともに、貴重な財産として活用し、住みよい快適な生活環境を形成するために、生活基盤の整備充実や保健・医療、消防・救急、高齢者福祉、子育て支援など、基礎的なサービス機能の充実を図り、町民の定住化と町外からの移住者などの受け入れを促進しています。

清流と森林に囲まれ豊かな自然が息づくまち厚沢部町で、まずは、ちょっと暮らしを体験してみませんか。

総務政策課政策振興係

（平成23年5月30日付第2761号）

歴史に感謝　未来へはばたく
元気あふれるまちづくり

はじめに

今から、122年前の明治22年8月に奈良県吉野郡十津川郷で起きた未曾有の水害は田・畑や道路が埋没し、これがせきを切って濁流となり、死者168人に及ぶ尊い命が失われ、流失・全半壊家屋600戸、村の7割に及ぶ言語に絶する大惨事となりました。家産を失い衣食を絶たれた600戸、2、489人が政府をはじめ関係機関の手厚い援護を受け、翌23年6月北海道石狩川中流域のトック原野に集団入植し、本町は開村いたしました。この新天地を母村たる十津川村にちなんで新十津川村と命名し、その後、昭和32年に町制が施行され現在に至っております。

▲ 開墾の状況

地勢は、札幌市と旭川市の中間となる道央空知のほぼ中央部で、石狩川の右岸に位置し東西35㎞南北30㎞、面積495・62㎢で、そのうち77％が山林となっています。気候は、内陸型で四季の変化に富み、増毛、樺戸山系の影響で、冬は西北の風が強く寒冷地帯で積雪量も多くなっています。積雪は1㍍前後であるが、山間部では2㍍に達します。人口は、農業の近代化や省力化による規模拡大により、農業従事者が最盛期の3分の1に減少したことなどの要因から、昭和30年の16、

雪まつり
メインイベントの「国際中華鍋押し相撲WAJIMA」

北海道 **新十津川町** しんとつかわちょう

199人をピークに減少を続け、平成23年10月末現在では、7、147人となり、高齢化比率は、32・7％となっています。

めずらしい成り立ち

北海道内で、単一団体の移住により設置された市町村は、本町だけだと思いますし、被災からわずか2カ月後には移民団が出発するなど、当時の努力がしのばれます。折角の機会なので、移住の経緯などに触れさせていただきます。

明治22年の災害発生後、在京の十津川郷出身者らにより、被災者救済策が検討され、特に生活基盤を失った約3千人の生活をどう再建するかが急務となりました。このため、移住が検討され、明治政府の北海道開拓方針に添って、北海道に移住し、北方防備にあたることは、十津川郷士先祖代々の忠君愛国の精神にかなうものとの意見も強かった一方、最北極寒の地では、到底生活できないとの意見もありました。

こうした中、上京中の北海道庁長官永山武四郎に面会した郷出身者らは、北海道移住への協力を要請。永山長官は、できる限りの便宜を図ることを約束し、このことにより、北海道移住への機運が一気に高まりました。これを受け郷内では、北海道移住の勧奨が行われ、政府に対し移住保護願が提出されました。

内容は、移住に際しての支度料や旅費、農具料など総額17万5741円の移住費の支給などでした。同年10月16日願は閣議で可決し、10月18日第1回移民200戸790人が十津川郷を出発し、このあと2回に分けて神戸港から北海道へ向かいました。移住に際し、天皇陛下から就産資金として2千円の御下賜があった旨の達しがあり移民一同を感激させました。

小樽に上陸し、汽車と徒歩で空知太（そらちぶと：現在の滝川市）へ。

11月18日までに全員が到着し、当時建設中の屯田兵屋に入居しましたが、完成した兵屋が150戸しかなく、1戸に4家族が同居する状況となりました。初めて体験する北海道の寒さに驚愕し、帰郷を企てる者もあったという中、移民誓約書が起草され新村建設を改めて誓い合いました。翌年1月北海道庁令で新十津川村が設置されました。

▲稲刈り

移住予定地のトック原野は、明治20年北海道庁が調査を行い、農耕適地として選定されていました。入植を前に碁盤の目に区画測量が実施され、また移住小屋の建設が行われました。

明治23年6月、抽選により割り当てられた土地を目指し石狩川を移民団は渡り、開墾に着手し、先ずはうっそうと茂った原始林の伐採から始まりました。当然のことながらすぐ作物が収穫できるわけもなく、道庁から2年間にわたり食料が支給されました。同年7月に第2次移民をもって十津川郷からの団体移住は終了しました。その後、他府県からの移住者が増え、開墾当初は畑作のみでしたが、北陸出身者らにより水田への転換が進められ、北海道内屈指の米どころの礎を築き、現在に至っています。

まちづくり

新十津川町では元気あふれるまちづくりを進めています。

◇あいさつ運動

まちづくりの基本は、人づくりであり、その基本となるのが「あいさつ」であると考えます。一日の始まりは家庭においても、社会においてもあいさつからはじまります。

朝の通学時に、笑顔で明るく「おはようございます。」とあいさつする子供たちや、地域活動に生きがいをもって取り組む高齢者の笑顔を大切にして、町民によるあいさつ運動を高め、毎日を明るく楽しく生活する「日本一あいさつのあふれるまちづくり」を進めています。

◇産業の活気あふれるまち

本町は開村以来、農業を基幹産業として発展し、特に水稲は、道内でも有数の米どころとなっています。創業

▶ふるさとまつり「泥（でい）ブリッジ選手権」

◀トマト

◀ピンネシリ登山マラソン

◀農業体験

100年の歴史を誇る町内の酒造会社はもとより道内各酒造メーカーに酒米供給しており、道内で屈指の生産量を誇っています。また、メロンやトマトなどのブランド化を進め販路の拡大を図っています。

観光では、約50haの敷地に温泉、スポーツセンター、プール、野球場、パークゴルフ場、宿泊施設などを設置したふるさと公園が集客の核となっていて、同公園を会場にふるさとまつり（当日入込12、000人）や、標高1、100mのピンネシリ山頂を目指すピンネシリ登山マラソン（350人参加）が行われ、学生の合宿などで利用されています。このほか町内では、ビールパーティー、味覚まつり、雪まつりなど四季折々のイベントが行われています。さらにグリーンツーリズムでは、全国から年間1、000人を超える生徒が農業体験のため、来町しています。また、豊かな自然の恵みを受けた特産品がたくさんあります。

高品質米の「ゆめぴりか」や「ななつぼし」、地酒金滴、ホルモンやジンギスカンなど全国各地からご注文をいただいています。皆さんもぜひご賞味いただき、ご感想をいただければ幸いです。

▲金滴

◇教育の充実したまち

本町は、文武両道の伝統を母村から受け継ぎ、教育に力を入れています。平成21年、教育環境を整備するため小学校4校を1校に統合し、小中各1校体制とし、校舎耐震化を進めていますし、平成24年度からの中学校武道の必修化に伴い平成24年度に剣道場を新設するべく準備を進めております。旧小学校校舎を改修して設置した、現代彫刻家五十嵐威暢氏監修による彫刻体験交流施設「愛称かぜのび」は、平成23年6月にプレオープンいたしました。

▶神社例大祭
後ろの新十津川神社は十津川村の玉置神社から移住の際分祀したもの。

五十嵐先生の作品は、全国でも多くの施設で設置されており、今後は、計画的な作品展示と、彫刻体験施設として、大勢の愛好者で活用されることが期待されております。

また、母村十津川村との交流は、小中学生・青年・婦人、スポーツ・文化活動などで多岐に交流し、絆を深めています。

新十津川おどり保存会では、国指定重要無形民俗文化財の奈良県十津川村武蔵踊保存会の大踊を昭和54年に伝承し、平成22年で30周年を迎えました。町内の各種行事で、大踊を披露し文化振興に貢献しています。

◇安全で安心なまち

町民が、安全で安心して暮らしていくことができるよう、住宅環境の整備では、土地区画整理事業や公共下水道事業などを実施いたしました。また、道路の安全を確保するために道路整備計画に基づき、街路事業や道路整備事業を計画的に進めています。今後は、明るく安全な街並みを進めるため、街路灯のLED化を進め、町営住宅の建設を促進するとともに民間アパート建設促進事業を支援し、定住人口の増大に努めていきます。

◀ふるさとまつり

また、過疎化・高齢化により乗車者数の減少が著しい農村地区の、路線バスの今後のあり方を検証する地域公共交通確保対策については、平成21年から町内でデマンド型交通を用いた実証試験を行い今年が最終年となっております。今後は、町の実態に適した交通手段を確保していきます。

◇健全財政と協働のまち

町民と行政が共に手を携えてまちづくりを進めていくため、平成23年1月1日に町の憲法となるまちづくり基本条例が施行されました。この条例の策定に当たり、2年間の歳月をかけ延べ32回の会議を開催し、まちづくりの理念や、町民、議会、行政それぞれの責務や役割などが定められました。条例の理念を周知するため、各地域で行われた説明会では策定委員自ら説明役を買って出るなど、委員さんの情熱が入ったものとなり、まちづくりに対する熱意に深く感銘したところです。また、本町では、平成18年から町職員が担当の行政区に入り住民活動の問題解決やアドバイスなどを行う地域サポーター制度を取り入れ、地域コミュニティの推進を行っています。

終わりに

9月上旬に発生した台風12号は、私達の母村奈良県十津川村をはじめ紀伊半島を中心に記録的な豪雨となり、平穏な暮らしを営んでいた多くの方の尊い命や生活拠点を奪いました。犠牲になられた方々に衷心よりお悔やみ申し上げます。また、3月に東北地方を中心に発生した東日本大震災で、全国各地に避難生活を余儀なくされている皆様にも心からお見舞い申し上げます。

この度の台風被害や東日本大震災による集団避難の模様は、本町の先人が、122年前の十津川郷で発生した未曾有の豪雨による集団移住を彷彿するものであり、被災された皆様のご心情を察するに余りあるものがございます。

先人達は、新天地に向かう時に様々な人たちから物心両面によるご支援を受け「皆さんからの温かい励ましに応えるためにも、新村を開拓する意思を強くした。」と聞き及んでいます。この度の被災者の皆様には、多くの人たちからの温かいエールを心の糧として、皆なで支え合い一刻も早く平穏な暮らしがもどりますよう心からお祈り申し上げます。

近年の急激な社会情勢の変化と相まって、人口減少や少子高齢化など様々なまちづくりの課題を抱えています。しかし、本町を開拓し、今日まで導いてくれた先人に感謝し、町民の輝く笑顔を守るため、常にスピード感を持ち、創造と挑戦をスローガンに「元気あふれるまちづくり」を積極果敢に進めていこうと考えています。

北海道新十津川町長　植田　満

（平成23年11月14日付第2780号）

夢を語れる学校

―人口※905人、村の地域力、北海道おといねっぷ美術工芸高等学校―

音威子府村について

○地形

音威子府村は、上川地方管内の北部に位置し、北東は宗谷地方管内中頓別町、北西は中川町、南は美深町に隣接する、東西22・2キロメートル、南北18・6キロメートル、総面積が275・64平方キロメートルの村である。地形は、村の中央を天塩川が貫通し、北西部地域は段丘、または扇状地で平地は少なく、南東部地域は概ね平坦な扇状地である。

○気候

気候は、四囲山岳に囲まれた狭隘な盆地的地形であるため、寒暖の差が著しく、平均気温は、12月～3月で、マイナス6度以下、6～9月は17度以上である。酷暑時には30度以上を示すこともあり、逆に、酷寒時にはマイナス30度以下にもなる。冬期間にあっては道内でも有数の豪雪地帯で、12メートルを超える降雪量がある。

○成り立ち

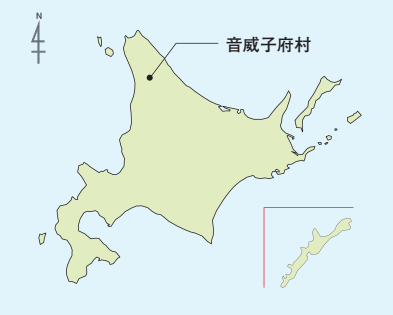
音威子府村は、明治34年帝室御料領地に編入、同37年には初めて開拓の鍬が下され、当時は士別村戸長役場に属し、同39年下名寄村戸長役場所管となった。さらに45年には、中川村戸長役場に属し、大正5年中川町より分村し、新たに常盤村戸長役場を咲来市街地に設置した。分村して上流域に集落を形成するのは道内の歴史上非常に珍しいと言われている。

大正8年には2級町村制が施行され、同14年11月に現在の音威子府市街地に役場を移転し、昭和38年4月1日、村名を「音威子府村」と改称し現在に至っている。

○産業

開拓以来、馬鈴薯を主とする畑作農業が中心だった。昭和初期には乳牛が導入され酪農家も増えたが、生産調整や価格の低迷などの外因のほか、従事者の高齢化・後継者不足などの問題が顕著化し、現在では一ケタの戸数にまで減少した。畑作農家は現在馬鈴薯

▲アトリエ１Ｆに並べられた作品群



北海道 **音威子府村** おといねっぷむら

※平成22年6月末の人口。

の作付は全くなく、蕎麦、南瓜が大規模に作付されている。絹サヤ、ホワイト・グリーンアスパラの出荷も行われているが、従事者の高齢化等の問題は酪農農家と変わりない。

○交通

大正元年に現在の宗谷線、大正3年に旧天北線が開通したことにより開発が進み、鉄路の分岐点としての「国鉄の街」として発展した。併せて国道40号線・275号線の分岐点でもあり、道北交通の要衝地として位置づけされてきた。しかし、昭和59年代前半からの国鉄合理化、昭和62年の分割民営化、平成元年の旧天北線の廃止と矢継ぎ早の体制的合理化により、人口が激減。地域経済、福祉、教育にも大きな影響を受けた。

その一方で、平成5年、村民の生活基盤、社会資本基盤において重要な位置づけを持つ高規格幹線道路（音威子府バイパス）建設計画が具体化され、「音威子府村産業振興計画」が策定された。その後数十年を経過し、ようやく平成21年度に一般国道40号音威子府バイパス事業として着工の運びとなった。平成22年度に入ってその工事が本格化し、本村の今後の繁栄をも見据える一大プロジェクトとして大いに期待されている。

▶音威子府村全景

高等学校の遍歴

現在本村の人口は905人（22年6月末現在）であり、全国各地、この人口規模で高等学校を市町村立で運営している自治体は無いと自負している。

北海道おといねっぷ美術工芸高等学校は、昭和25年名寄農業高等学校の分校として始まり、同28年に村立音威子府高等学校として独立した。当時からの大きな特色は一貫して「教諭」と「生徒」の距離感がなく、地域に根付いていたことである。しかし当時は当たり前と思われた定時制も、経済及び教育の急激な発展により、生徒が激減。時代の流れとして「廃校」も余儀なしと誰もが推測していた。

ちょうどそこに狩野剛校長が昭和53年に赴任になったのである。彼はすぐに音威子府村を隅々まで見て聞いて回り、村の「宝物」である「豊富な木材」と「村人の心の熱さ」を活用し、全国どこにもない高等学校づくりに自分の人生をかけることになった。

校長の熱意、そしてその発想力と実行力が、地域住民を巻き込み、人が人を呼び知恵が知識となり、思い描く高等学校の姿を現実にしていった。それは正に「夢を現実に」であった。また定時制でありながら、芸術科目として工芸、職業科目としてインテリアの実習を取り入れた。この「奇想天外」な学校運営は、親はもちろん進学しようとする生徒たちにとって特に新鮮で「一芸に秀でる」「才能を伸ばし可能性を追求する」として全国各地から生徒が集まった。昭和55年には120名を収容できる「チセネシリ（アイヌ語で音威富士の意味）寮」も完備された。

昭和59年、村立から道立校への「格上げ」も検討されたがその特色と意義深さを認識し、村立高等学校のまま全日制工芸科単置とあいなった。

翌60年には新校舎を建設し、61年には工芸実習室、平成6年には家庭科実習棟と体育館を新築し現在に至る。この間寮の増築・新築を行い21年度に更に寮を増築し、現在の在校生徒数は実に119名を数えるまでになった。

3桁の生徒数を誇る高等学校は近

▲北海道おといねっぷ美術工芸高等学校

◀工芸授業風景

▶美術授業風景

隣町村には存在せず、上川管内北部では4番目の大きな学校でもある。

ここには、可能性を信じ、高等学校を温かく見守り、常に「応援」する教育関係者と、高等学校を運営する資金「村予算」を出し続ける行政側の「心」があると実感する。

教育が地域に根ざす、生徒たちが地域の主役になる、その主役が地域に元気と勇気をもたらす、だからこそ地域住民も「高校生と共に過ごす時間の大切さ」を実感し、応援団と化していく。

実は地域づくりにはたくさんのキーワードが存在する。どこの市町村も「基幹産業」の発展を考え「地域社会の底上げ」策として福祉や医療を掲げるが、そこに焦点を定めるには「地域力」と表現される「元気」さや「何か誇れる自慢のもの」が必要である。

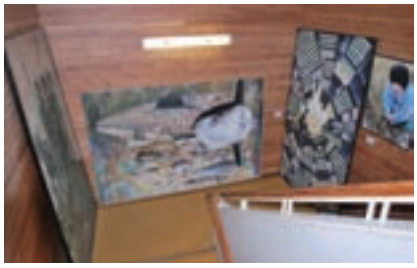
本村の高等学校が正にそれで、村民は、高等学校の生徒たちとなにかにつけ必ず関わりをもつ。特に村一番の大イベントである初夏の村民運動会は、高校生たちには、さながら「高校体育祭」でもあるようだ。900人の人口で約300人が参加する運動会は、高校生たちの歓声や笑顔、真剣に取り組む姿に、誰もが「この村民運動会を続けられるのも高校生のおかげ」であり、「なくてはならない存在」と実感しているに違いない。

「夢を語れる学校づくり」へ

平成18年4月には、新任校長として札幌から石塚耕一氏が着任した。彼の夢もまた「夢を語れる学校づくり」で、それを実行していくための原動力は平成18年度に設置された「学校評議員会議」である。「東海大学旭川校との高大連携」事業や家具デザインで世界をリードするスウェーデン、レクサンド高校との「国際理解教育」事業は、高校の教育力向上と存在感を高め将来への可能性を大きく示した。高大連携では、「東海大学へ出向き、大学からは教授がやってくる」の繰り返しの中で、生徒たちは自分たちの発想を飛躍的に高め、更に技術的にも成長している。国際教育理解では、高校間の交流は非常に珍しく、スウェーデン大使館からも「積極的な交流を」と、平成20年から本校の生徒を2～3名派遣して高いデザイン力と技術力を学び、またレクサンド高校からも生徒を受け入れている。スウェーデンから来る生徒は「チセネシリ寮」で在校生たちと同じ生活を1週間程度送り、双方の語学力を高め合っている。

美術工芸高等学校の教育課程は「工業高校」に習って進められていたものを「美術高等学校」に進化させなければならず、「美術工芸教育実践発表会」「教育課程研究指定事業」への取り組みが始まった。教職員全員の英知結集が実を結び、19年度には新教育課程が編成され、20年度実施、さらに文部科学省の支援を受け、東海大学や教育大学との連携で美術工芸教育実践研究発表会が実現した。

全クラスの公開授業や教諭のレポート発表が全国に発信され、平成19・20年度の国立教育政策研究所教育課程研究指定校（美術）21年度は同教育課程研究指定校（工芸）へと全国的にもトップクラスの教育実践校となり、教育関係者の訪問が飛躍的に多くなっている。



▲2Fアトリエ作品群
◀2F階段アトリエ作品群

本校の教諭は、「造る・描く者として自分を高めよう」と生徒同様の志を持っており、その真剣さに色あせがないと断言しても良い。卒業・入学式時期には毎年教職員6～7名で展覧会を地元で開催して、「教える側のクオリティーの高さ」を発信している。献身的な教職員の努力が、信頼へと変わり、生徒たちは、のびのびと個性を伸ばしていけるのであり、1クラス40名の定員、3学年で120名という小規模高等学校ではあるが、教諭たちの昼夜を問わず、積極的に生徒と向き合う姿勢が、目的意識の変化に繋がっていく。ドロップアウトは皆無に近い。このような環境の中で生み出される生徒たちの「絵画」や「工芸」作品の発想力及びデザイン力、制作力が、道内で群を抜いているのも当然で、全国でもトップレベルと言っても良い。

高文連、北海道学生美術展、道展、道展U21などの出展では常に最高賞を受賞する生徒もおり、出展した生徒ほとんどが入選という状況である。大学へ進学する者も増え、今では道内の美術界にとって大いに期待される逸材に成長している者もおり、後輩への大きな刺激になっている。

北海道おといねっぷ美術

工芸高等学校では「夢を現実に」「優しさは人を変える」、この言葉を実践すべく、経営努力を続けている。

もう一方の栄光

本村の村民は、1年のうち半年間を雪と共に暮らす。積もれば捨てられるやっかいな雪、これを逆に活用したのが「クロスカントリースキー」である。年末の12月下旬には27年前から全日本大会と全日本学生スキーの大会が1週間開催され続けている。

オリンピック出場、ワールドカップなど海外でも活躍する選手たちがこの時期、目の前で競技するとあって地域の子供たちへの取り組みが始まり、今では地元生まれの本校出身者で平成26年のソチオリンピックをねらう選手も輩出するまでになった。

クロスカントリー部は第53回冬季インターハイ（平成15年2月）と第54回インターハイ（平成16年）で2連覇を達成するという輝かしい栄冠を手にしている。

この栄光の陰にもやはり教諭の存在がある。教諭と村教育委員会、関係者の努力によって地元中学からクロスカントリースキー選手が入学するようになった。「高校に行ったら野球をやりたい、そのための冬のトレーニング」にしか考えられなかった競技が逆転して、それを専門に行う選手が生まれた。「いち早く滑れて5月に入っても平地でスキーができる」環境を求め道内から有力選手が集まりだし歴史が生まれた。現在指導に当たっている教諭（バンクーバーオリンピック出場・夏見円さんの恩師）のもと、現在は9名の選手（女子3名男子6名）が在籍。4年ぶりに地元中学から2名の選手が入学し全員「インターハイ全国制覇」を目指し練習に励んでいる。

◀クロカン練習風景

社会教育の実践

木材工芸を教育に取り入れ「ものづくり」を通した人間力の育成の一方で、その振興を図っていく上では、砂澤ビッキという「精神的支柱」の存在が必要だった。

彼は、筬島（おさしま）を拠点に世界に向かって現代彫刻を発信しながら、作品が評価されていったが、その当時は「遠い存在」でしかなかった。ビッキが没して今年で22年が経過する。8年前に彼の功績をたたえてオープンした記念館が、今高校生たちのボランティアで成り立っている。

▲ビッキ記念館

オープンしたての記念館には展覧会でしか見学できなかった作品が常設されているとあり、平日でも100人を超える見学者があった。運営に苦慮した関係者は、休日に遊ぶ場所のない高校生徒に目を向け、生徒指導の教諭と協議し、「運営の手伝い」を目的とした高校生ボランティアをスタートさせた。

毎週末1年生から3年生まで4人1組でやってくる高校生が、館内の清掃、土産品の販売、喫茶コーナーなどを手伝い、大きな声で「こんにちは」「ありがとうございました」と若々しい声で清々しく来館者を迎えている。

人見知りする生徒も徐々に大きな声が出るようになり、今ではビッキの作品紹介なども行うまでになっている。関係者は、「知識は学校で学べ。記念館では知恵を学べ」と生徒たちに話し、人生ことと次第によっては「習うよりなれろ」と言うことを知ってほしいとその活動を温かく見守っている。

最後に

音威子府村第33代千見寺正幸村長は高校生の姿、高校の発展に人一倍大きな思い入れがある。自身が村職員時代に高校に勤務し「繁栄と衰退」を実体験した経験があるからだ。千見寺村長は現在の高校の存在、そして高校生に大きな未来を託す。

『日本の未来を担う高校生が真摯に取り組む姿は何物にも代え難い、江戸初期「慶長」の時代に「春は花　夏時鳥（ホトトギス）　秋は月　冬薄雪に　人は心」と詠んだ方がおりますが、四百年経過した現在でも「人は心」です。高校生がひたむきに取り組む姿はそのものであり、これを伸ばさないことには世は何も実をつけません。地域に芽生えた大切な宝を更に磨きをかけ末永く「世の宝」としたい。』

音威子府村は高等学校と共に今後も全国に特色ある村づくりを発信し続ける。

教育委員会　宗原　均

（平成22年9月6日付第2732号）

この村であなたの〝星〟を見つけてください

―マイスターズ登録者※8、538人に―

何にもないけど、何でもある

初山別村って？／北海道は北のはずれの／小さな村です／何があるかって？／何でもあります

空と海、／風と／太陽と土／そして／豊かな恵み
デパートないです／コンビニも／電車、ライブハウス／ないです／でも

磯の香り、星空／雪どけ水の音／あります／ためしに「住んで」みます？

「食」プロで作成したリーフレットの一節です。

北海道北部日本海沿い、農業と漁業を基幹産業とする、人口千五百人に満たない小さな村、それが初山別村です。都会の利便性には及ぶべくもないけれど、暮らしに必要なものはあります。何より豊かな自然の恵みがここにあります。

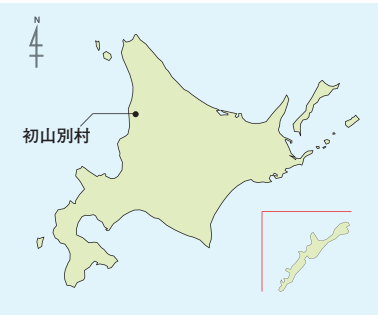
秋にはもち米が実ります。冷涼な気候、潮風のおかげで、農薬の使用は最小限ですみます。北の日本海の幸があります。タコ、ヒラメ、ナマコ、フグ・・・何故か小型のマフグがあがります。

星の村 マイスターズシステム

そんな村に平成元年度、天文台ができました。口径65㎝。当時、東北以北最大の天体望遠鏡を持つしょさんべつ天文台は、毎年村の人口の数倍～十倍の入館者を得、星の村として広く認知されました。

そして、平成7年7月7日、初山

眺望抜群、村のオアシス「みさき台公園」海の向こうには、「利尻富士」が浮かんで見えます



北海道 **初山別村** しょさんべつむら

※平成22年3月末日現在。

▶みさき台公園の中にある「しょさんべつ天文台」で、星の登録を受け付けてます

別村は全世界に向け、マイスターズ宣言を発信しました。曰く、

★星を所有することは誰もできないことであるが、星の輝きに心癒すことは誰にでも許されていることである。

★その星の輝きを「自分が所有する」と主張することを、こと初山別村内においてのみ許す。

★本村は申出のあった星の名前を永久に保管する。（抜粋）

数ヶ月後の「漫画『巨人の星』で星一徹・飛雄馬が指さしていたあの星がどの星だったのか、村職員が特定した」とのニュースとともに全国のマスコミに取り上げられました。

また、当時山手線に出した広告が縁で、ドラマ「白線流し」の舞台の一つとなりました。

マイスターズシステムの登録者は、現在8、538人に及びます（平成22年3月末日現在）。初山別村を第二の故郷とする方々です。

「食」プロ 様々な「食」の開発

平成20～21年度、村は「初山別村『食』ブランド化プロジェクト」を実施しました。自然の豊かな恵みである村の「食」を貴重な観光資源と捉え、「食」を売り込むことにより、一次産業の収益性を高めるほか、二次三次産業に波及させることを目的としたものです。プロジェクト名には〝村の「食」をブランド化する〟という意味のほか、〝「食」で村をブランド化する〟という願いを込めています。

天文台があるみさき台公園は、日本海を臨む岬にあり、そこから見る海岸線、利尻富士（利尻島利尻山）、天売・焼尻両島の島影、日本海に沈む夕陽は来村者にいつも絶賛されます（村民には見慣れた景色でその度再認識するのですが）。

公園内にはキャンプ場、バンガロー、パークゴルフ場、野球場、道の駅、温泉宿泊施設・岬センターがあります。ハーレーダビッドソン愛好者がこの地を気に入り、毎春キャンプ集会を開いています（200台以上のバイクが集まります）。

◀期間・数量限定！福多幸（ふぐたこ）弁当には、1日1個、小さな幸せ（当たり）が、こっそりかくれてます

▶新食感！「天然真ふぐ照り焼き丼」

「食」による仕掛けの第一弾としてフグに着目しました。初山別村では何故かフグが獲れます。小型で、浜では「豆フグ」と呼ばれ、安価で取引されていました。このフグともう一つの特産品タコを素材とした道の駅弁当「福多幸（ふぐたこ）弁当」を開発販売しました。フグとタコは「福」と「多幸」。何だかめでたい、縁起がいい、というわけで、一日に一個だけ小さな幸せを忍ばせた〝アタリ〟をこっそり紛れ込ませています。地元食材に拘ったこの弁当、期間・数量限定での販売にもかかわらず、好評をいただいています。

▶岬センターの看板メニュー「ひらめ御膳」は季節限定

◀なまらうめぇ（超、うまい）、スイーツはハスカップカタラーナ「流れ星の純愛」冷凍すれば、アイスクリームの食感

また、旅行雑誌じゃらんとのタイアップによる新・ご当地グルメ「初山別天然真ふぐ照り焼き丼」を開発販売し、村内食堂三店舗で年間数千食を食べていただいています。

次に、岬センターで「ひらめ御膳」を開発、提供しました。

初山別村の活ヒラメは、漁師の手で一枚一枚丁寧に釣られる天然ヒラメで、札幌市場でも高い評価を得ています。このヒラメを素材としたヒラメのフルコース「ひらめ御膳」を季節限定、時価（概ね三千円～三千五百円）で提供したところ大きな反響を得ました。北のシェフとして著名な貫田シェフにもアドバイスいただいたこの御膳、今では岬センターの看板メニューの一つになっています。

そして、カタラーナ。平成21年度は村制施行100年、国技館も誕生100年。初山別村といえば「星」、大相撲も「星」を大切にする世界。というわけで、スイーツのプロデュースを元関取・大至氏に依頼し、完成したのがハスカップカタラーナ「流れ星の純愛」です。また、大相撲つながりでスイーツ親方こと元横綱大乃国・芝田山親方に試食してもらったところ、大絶賛、直筆の推薦文をいただきました。

◀「星の雫」（上品な甘みと香りをはなつ大人の味）と「茜の雫」（ほんのり甘酸っぱい爽やかな味わい）は、セットでどうぞ

そして、みりん。みりんはもち米で作られます。また、初山別村はもち米の産地です。というわけで、村内もち米農家7人が会社を設立、自分たちのもち米を酒蔵に持ち込み、贅沢至極な〝飲むためのみりん〟を造らせています。みりんの名は「星の雫」。また、村の特産品である不老長寿の妙薬・ハスカップの果汁を加えた「茜の雫」も開発、初山別村から新しい食文化を発信しています。

さらには、各家庭に伝わるお菓子の商品化に向けた奥さんグループの活動も始まっており、そのうちの一つ、完全手作りおこしが「ほしおこし」のネーミングで最近製品化されました。

外への発信～やっぱり星

星、お預かりしてます／大切な想いがこもった星を

皆さんは、今／クラクション飛び交う喧騒の中／きっと星を思い出

平成21年10月　全国に募集した「星にまつわるシナリオ大賞」受賞作が東京銀座の博品館劇場で、昭和九年会チャリティ朗読劇「星の雫」として上演されました

す暇はなく／日々忙しいんだろうな／と思いながら

でもある日／クラクションが途切れた瞬間に／大切な何かを思い出す瞬間が／いつの日か必ずあるから

大切に／お預かりしてます

冊子「綺羅星列伝」の冒頭文です。マイスターズシステムの登録申込書とともに「想い」を添え書きしてくれる方がいます。登録の数年後に後日談として手紙をくれる方がいます。システムを始めて間もなく、村は登録者の方々に案内文を送り始めました。曰く、

「星に託された『想い』を物語として寄せていただけませんか。村はその物語をあなたの星とともに永遠に『記憶』します。そして、いつの日かその時の自分に会いたくなったら天文台にお越しください。」と。13年後、物語は250余編となり、「綺羅星列伝」というタイトルで一冊の本にしました。

「綺羅星」とは、ありったけの「想い」を込めて登録された星の一つ一つのことです。「列伝」とは、星に託された「想い」（物語）が集まった、いわばマイスターズシステムそのもののこと、「綺羅星列伝」というタイトルにはそんな意味を込めています。

平成20年のクリスマスに発行し、マイスターズシステム登録者全員に贈りました。

後日、この冊子をご覧になった藤村俊二さんから「何かお手伝いできるかも」と人伝てに言っていただきました。昭和九年会とのコラボレーションの始まりです（昭和九年会＝藤村俊二氏ほか昭和9年生まれの芸能人・文化人の集まり。様々な社会貢献活動をしている）。

平成21年6月、村は「星にまつわるシナリオ大賞」を全国に募集、各地から寄せられた作品の中から大賞、特別賞を選考しました。

10月には博品館劇場（東京銀座）で、昭和九年会チャリティ朗読劇「星の雫」として上演され、マスコミ各社に取り上げられました（北海道食のアドバイザー出村氏にご尽力いただきました）。

これから～まだまだ端緒

「食」プロは北海道の「地域再生チャレンジ交付金」の支援を受けて実施したソフト事業の集合体です。村内に眠る様々な資源・魅力に、ちょっとだけ手を加え、村外の方にとっても魅力的なものにする作業と、初山別村をそのまま伝える作業を重ねました。

しかし、村の魅力はまだまだこんなものじゃないと考えています。農家のおばちゃんの自家製の漬物や、正月のつきたての餅や、船上で食べる透明なイカや、街灯に飛んでくるカブトムシすら村の財産だと考えています。

よそいきではなく、普段着のままの初山別村を好きになってもらい、村民の収入がちょっとだけアップする、最終的にはそこに辿り着きたいと考えています。初山別村の挑戦は、まだ始まったばかりです。

平成22年1月30日、国際天文学連合（IAU）により、小惑星6158番は「Shosanbetsu」と命名されました。とても小さな星ですが、「ショサンベツ」と全世界の人に呼ばれる星の誕生です。

―星空に夢とロマンを求めて

初山別村のキャッチフレーズです。

経済課　大水秀之

（平成22年5月17日付第2719号）

食材王国しらおい誇りある故郷づくり

▲虎杖浜温泉キャラクター「ゆたら」

北海道にある元気まち

白老町は、北海道の南西部に位置し、東隣に苫小牧市、西隣に登別市が接する。平成23年1月現在、人口19、623人、世帯数9、726戸、面積は425・75㎢。町の基幹産業は、工業を中心に一次から三次産業までバランスよく構成されているまちである。

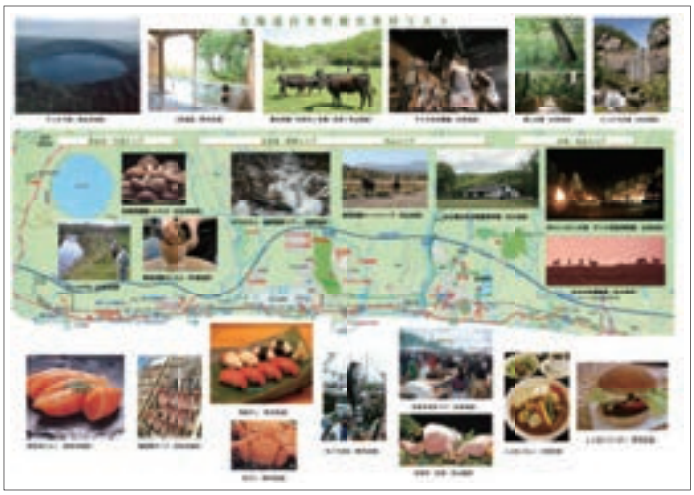
産業の概要

目の前に雄大な太平洋を望み、水産資源が豊富であり、水産業ではスケトウダラを中心にさけ、毛ガニ、貝類が水揚げされ、優れた加工技術による品質の高い「虎杖浜たらこ」が有名であると同時に、全国有数の透明度を誇る倶多楽（クッタラ）湖、町の背後に広がるほぼ手つかずの原生林など美しい自然がいっぱいである。その中で農林業は北海道でも有数の黒毛和種「白老牛」の生産や養鶏（鶏卵）、シイタケなどの栽培が盛んである。一方、工業は、道央中核地域に属し、地域産業の流通拠点である地方港湾白老港が整備され、製紙業をはじめ、食品製造業、機械器具製造業、精密機械製造業などが進出している工業団地がある。また、産業・流通の交通アクセスにも優れ、道央自動車道（陸）、白老港（海）、千歳空港（空）に隣接している。気候は道内でも夏は涼しく冬は雪が少なく温暖である。

さらに、本町は、道内を代表するアイヌ文化の伝承の地であり、自然を神としたアイヌ民族の生活と文化を復元し保存伝承している（財）アイヌ民族博物館には、多くの修学旅行生や外国人旅行者をはじめ、町全体で年間約200万人の観光客が訪れている。近年は後で紹介する「食材王国しらおい」の取組みとともに食産業と観光が連携しさらなる地域振興を図っている。

▲ ポロトコタン

北海道 白老町 しらおいちょう



▶白老観光素材リスト

町民活動・福祉の概要

町民活動は、平成3年地域C－（コミュニティ・アイデンティティ）の導入以来、「元気まちづくり」に取組み、協働のまちづくりが進み、加入率100％である町内会連合会が地域自治を進め「町民まちづくりセンター」として町内会と各種ボランティア・NPO団体、文化・スポーツ団体、自然環境活動団体などの町民活動団体とのネットワークによる活動の取組み、情報の収集・発信、相談などの機能を有して活動している。また、議会改革の取組みも注目され、白老町議会では国内で初めて「通年議会」の導入や議員活動の充実に取り組んでいる。さらに、子どもからお年寄り、障がい者など福祉の取組みも長年にわたり盛んで、NPOによる子育てネットワークの取組みや障がい者が生き生きと働く事業所などがある。近年では高齢者に操作性を向上させた携帯電話を貸与し、高齢者の安否確認や買い物などの生活支援、地域の支援ボランティアへの相談や緊急通報機能をもたせる「高齢者見守り・生活支援システム事業」が注目を集めている。

環境活動の概要

環境活動は、自然環境保全活動としてNPOが活発に活動するほか、ゴミをリサイクルするという最先端のエコを実践する「ecoリサイクルセンターしらおい（白老町バイオマス燃料化施設）」で町内から出る可燃ごみ、生ゴミ、木くず、食品残渣、廃プラなどの多様な廃棄物を飽和水蒸気を用いて固形燃料に生成し、工場の石炭代替燃料として使用することでリサイクルしている。この施設によって19％だったリサイクル率は90％以上にまで上昇し国内でもトップのリサイクル率に達することから注目されている。

このように白老町は、人が元気、自然が元気、産業が元気な「北海道にある、元気まち」である。とりわけ、今回は、食と観光を中心として「誇りある故郷づくり」に取組む産業活動をレポートする。

「食材王国しらおい」の取り組み

◇低迷する観光産業を立て直す

白老町では、平成3年度に250万人を超えた観光客数が、平成17年度には185万人にまで減少し、観光産業は危機的状況に直面していた。特に、観光の基幹施設であったアイヌ民族博物館の入場者数も平成3年度の87万人をピークに平成17年度には23万人にまで落ち込んでいた。

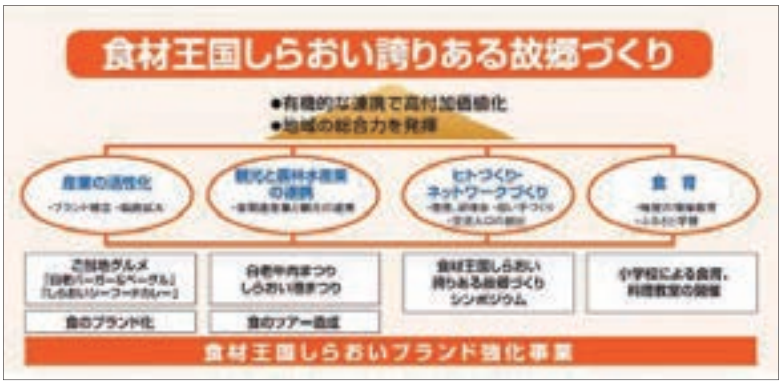
行政においてもこの危機感の高まりから、それまでの管理・指導型の体制から実践・営業型の組織体制に改編し、自治体間の広域連携の確立や民間旅行社との交流による振興策の導入など官民協働による地域活性化に取り組んだ。

そのことから、本町の観光特性を検討し課題を克服するために、①町内に点在する観光資源を有機的に結びつける。②旅行者の誘客と滞在時間の向上による観光消費額の増加を図る。③裾野の広い観光産業から地域全体に経済波及効果と活力を創出することに注目して提案されたのが、「食」が文化、自然、温泉をつなぐキーポイントとなる「食材王国しらおい」の取り組みである。

◇官民協働の推進体制づくり

白老町では、「港まつり」、「牛肉まつり」や「白老港朝市」など、これまでに商工会、農協、漁協が中心となって開催されている産業イベントによる地域活性化に向けた取り組みをさらに発展させ、町をはじめ商業・観光事業

▲牛肉まつり　2011年は、6月4、5日に開催され、来場者は、過去最高の49,500人でした！



▲食材王国しらおい推進理念図

者、学校や教育機関などとも連携して、地域に根ざした豊富な食材を用いた「地産地消」による新たな地域づくりに取り組むため、平成16年度から啓発事業を開始するとともに組織づくりを行い、平成18年度に「食材王国しらおい地産地消推進協議会」が発足した。協議会は、食に関する消費者と生産者の信頼関係の構築、豊かな食文化の継承や発展を目指し、地元の多彩な食資源を基盤に、生産から加工、流通、消費に至る取り組みによって食品部門の基盤強化、観光産業の活性化を図り「誇りある地域づくり」を進める体制とした。事業の柱となっているのは、「産業の活性化」「観光と農林水産業の連携」「ヒトづくり・ネットワークづくり」「食育」の4つであり、この推進理念により地域ブランドを強化して町の未来に繋ごうとしている。

◇食材王国しらおいの主な歩み

【啓発期】（平成16～17年度）

故郷の素晴らしさを皆で知ろう

まず、地域の団体や地域住民に対する働きかけとして、町職員が町内の様々な施設や企業を個別に訪問し、抱えている課題を聞き取った。そのことにより課題解決に向けてこれまで繋がりのなかった事業者間や産業間を繋ぎ新たな産業が創出されていった。

観光客が白老の食を満喫する環境をつくるためには、町民による地産地消や生涯食育も必要であると考え、平成16年に開催した「食材王国しらおい誇りある故郷づくりシンポジウム」を皮切りに白老消費者協会による「食の文化祭」、札幌グランドホテルによる白老の食材を活用したフェア「大白老祭」、三国シェフと子どもたちによる味覚の情操教育「食育授業」、商工会による「産消協働ショップ」など多岐にわたる事業を実施した。

▲ 試食会

【実践期】（平成18～19年度）

飲食店との連携強化、生涯食育へ

平成18年度には農・漁業、観光業界から消費者協会に至るオール白老による「食材王国しらおい地産地消協議会」を設立。町内初の取組みとして、普段は町内に流通しない白老近海で水揚げされた本マグロを提供する「まぐろの日」を企画し、町内の飲食店6店で開催したところ、各店とも平日の2～3倍の入込客を記録するなど好評であった。

そして、観光協会では、町内飲食店と協賛したご当地グルメとして「じゃらん」とのタイアップ企画で「白老バーガー&ベーグル」を開発。当初10店舗が域内調達による商品開発と販売を開始し、年間5万個を越す売り上げとなった。また、商工会においても全国商工会連合会の支援を受けて、独自ブランド「白老粋品」を開発するなど飲食店が中心となった地場産品との連携が強化された。

また、食育の取組みは小学校での単発な授業から総合学習と連動した取組みに成長し、北海道栄高等学校では選択授業である「味わいクラブ楽食」の学習テーマを「食材王国しらおい」として、レシピの考案から飲食店でのテスト販売に至

▼じゃらんとのタイアップで
生み出されたしらおい蔵バーガー

る授業として深まった。

【発展期】（平成20～22年度）
産学官民連携による
ビジネス構築を目指して

5年目を迎えた平成20年度は、北海道の支援を受け、食による地域活性化を目指した「食材王国しらおいブランド強化事業」としてプロジェクトに取組み、内容は、①白老「薬膳料理」開発事業　②元気農園プロジェクト事業　③しらおいシーフードカレー開発・PR事業　④海の畑づくり事業　⑤食材リスト作成事業の5つで構成され、本町の豊富な山海の幸やアイヌの伝承有用植物を素材に、地域に根付く文化の独創性を前面に打ち出し、産学官の連携による新たな料理・食品・商品を開発して、生産から加工・販売までトータルコーディネートすることで、食材に「付加価値」を与え、産業の底上げを目指した。

▲ アイヌ伝統料理

◀「白老牛」の図形商標

◇取組みの成果とまちおこしへの効果
（白老の特性を活かした振興策）

観光客数の減少や商工業の低迷から始まった「食材王国しらおい」の取組みは、従来の行政の仕事を大きく変えた。ひとつは観光や商工といった縦割りの仕事や調査・報告といった管理型の体制を、より行動実現型にするための行政内連携体制とともに、現場主義の実行や産業間連携が深まり関係機関の垣根がなくなったこと。これまでの民間が中心の活動からまち全体を考えた地域振興として活動できるようになったこと。そして職員が白老町をトータルに売り込むセールスマンとして企画書を作成して積極的に営業し、旅行会社の商品化が実現していったことなどで、平成20年度には観光客の入込数が208万人にまで回復した。

しかし、まだまだ国内景気の低迷が続くなか、課題は山積しているが、農林水産業の生産者から加工業者、飲食店、福祉・環境関連事業者などが連携することでお互いが抱える課題を解決できることが多くあることに気づき、自ら主体的に取り組もうとする意識変化がある限り将来への可能性が高まった。観光の形態も時代とともに変化し、団体旅行から個人旅行へ、見学旅行から体験旅行へ、そして、健康旅行や産業観光など多岐にわたる。平成23年、本町では、バラエティーに富んだ産業を抱える町の長所を活かして、中学校の宿泊旅行向けに職業体験メニューの開発を進めている。農業・漁業体験のほか、ネイチャーガイド、文化伝承者、学芸員、陶芸指導、リサイクル業、ホテル業、小売業、福祉施設などの1次～3次産業までの全てで受入れ可能な体験商品をつくったところ、早くも6校の受け入れを開始した。

▲ ポロトコタンの夜（チセ夜景）

さらに、本町は全国町村では珍しく東京事務所を置き、企業・観光・商工といった部門を中心に職員を常駐させ、首都圏での企業や産業との連携を強化して、町内の産業界とともに生産・消費や誘客の拡大を図るシティセールスを行なっている。その結果、首都圏発の旅行商品の開発・催行や旅行会社の担当者などが下見に多く訪れるなど、また、首都圏の飲食店で白老地場産品の取り扱いが増えるなどの効果が現れている。

このように積極的に活動する白老町は、アイヌ文化という地域独特の資源や自然の豊富さ、そして何より産業間連携や人材ネットワークという利点や強みを活かして、食と観光、食と産業という切り口に着目して「食材王国しらおい」を進め、誇りある故郷づくりを目指している。

白老町産業経済課　高橋裕明
（平成23年6月27日付第2764号）

「自然・利便性・話題と魅力は多い町の課題」

―移住・定住化促進による活気あるまちづくりを目指して―

はじめに

安平町は平成18年3月、追分町・早来町が合併して誕生しました。

札幌市から50㎞ほどの道央圏に位置し、北海道の空の玄関「新千歳空港」と北海道の海の玄関「苫小牧港」に隣接し、ＪＲ室蘭本線をはじめ道央と道東を結ぶＪＲ石勝線や道東自動車道が通るなど、交通・物流の要衝として陸海空に恵まれた場所にあります。

町内には多くのゴルフ場があり、夢のゴルフ三昧も実現できる場所となっており、ゴルフをされる方からは「ゴルフ銀座」とも言われるほどであります。

そのほか、日本競馬界トップクラスの競走馬を育てている牧場が数多くあり、多くの馬が放牧されている北海道らしい風景を目にすることができる地域となっています。

自然と調和した住宅地

安平町と土地開発公社では、町内3か所の分譲地を造成し販売を行っています。

それぞれ特徴をもった造成地のうち「ラ・ラ・タウン・おいわけ」をご紹介します。

かつては蒸気機関車の格納庫などがあった追分機関区跡地の一部に「ラ・ラ・タウン・おいわけ」はあります。

新千歳空港に近く、駅には特急も停車するアクセスの良さから、北海道外からも多くの方が住まわれています。

住宅の屋根を三角屋根にすることなどの建築協定や、電線の埋設化を行い電柱のない美しい家並みを実現した住宅地として整備しています。

ゆとりのある敷地ではガーデニングも楽しめ、目の前にある日本最古の保健保安林「鹿公園」との調和で四季を感じた生活を楽しむことができます。

電線埋設により電柱のない美しい町並みを実現。
豊かな自然と便利な生活環境が人気です。

北海道 安平町 あびらまち

▶住宅敷地内でのガーデニング

◀住宅地に隣接する鉄道資料館に静態保存されている蒸気機関車D51

定住化促進のための取組

環境の良さに限らず移住への促進（後押し）対策として「定住促進条例」があります。

平成18年に合併して誕生した安平町では旧町時代より人口確保対策の取組を継続しており、今までの単に町の分譲地の販売促進対策ではなく子育て世代や多子世帯への支援も見直した移住者、在住者に魅力のある町としての取組を進めています。

1・経済面の支援

①住宅建設奨励助成金

町及び土地開発公社が販売している町内3つの分譲地に住宅を建設した場合に限り助成金を支給

最高50万円の助成金支給

②出生祝い金

町内で利用できる商品券等の金券などを支給する。

第1子は　3万円相当
第2子は　5万円相当
第3子は　10万円相当
第4子以降は　50万円相当

その他子育て世代・多子世帯への支援として、町内認可保育園へ同時入所している場合、保育料が2人目が半額、3人目が無料とする保育料の負担軽減の支援もあります。

2・「おためし暮らし」住宅

「おためし暮らし」住宅を用意した理由の一つとして、合併により「安平町」のネームバリューの低下があげられます。

北海道では、平成17年頃から「団塊世代」の大量退職者をターゲットに本州から北海道へ移り住んでもらう取組が始まりました。

そんな中「安平町」は新しい町となった時期でもあり、本州方面への町のPRも含めはじめました。

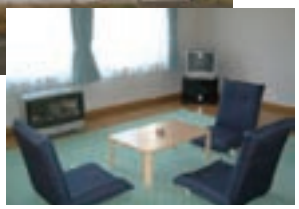
①不安も多い移住への検討材料として

団塊の世代の方々をはじめ、北海道へ憧れを持たれている方は、雄大な北海道の大地への期待と、見知らぬ土地への不安や雪の問題など、様々な面での不安、その両方を持ちながら移住を検討されていると聞いておりました。

それらの不安を少しでも解消してもらい、北海道そして安平町の良さを知ってもらうことで、将来移住先の候補地の一つとして検討してもらうため、「おためし暮らし」を平成19年度から実施しました。

●住宅について

この「おためし暮らし住宅」については、昔の職員住宅（教育長公宅）



▲おためし暮らし住宅は3LDK平屋
▶8畳のリビングは暖房機なども完備

◀そば打ち体験

を利用しております。

住宅には、体験者が手ぶらで安平町暮らしができるよう、家電や家具など、最低限の生活必需品も用意しています。（光熱水費は実費負担）

2人で1週間：24、000円
2人で1ヵ月：48、000円

②体験事業について

滞在中には、陶芸体験・そば打ち体験をはじめ、町内の施設を利用してゴルフやパークゴルフでスポーツを、そして北海道の自然を満喫できる森林浴散策などを楽しむことができます。

また、体験者の方々は滞在中に町内の分譲地や宅地、中古物件を見て回られたり、職業安定所まで行かれるなど、滞在期間は様々な利用をしています。

町での暮らし方には・・

四季折々、町では町民を対象に生涯学習や健康教育を目的とした各種事業を実施していますが、それらは楽しい中にも健康な生活につながる工夫がなされています。

▲(上)水泳教室　(中)雪上パークゴルフ大会　(下)コンサート

例えば室内プールを使った事業には、水泳教室や健康教室などを設け、子供向けや高齢者向けなど、用途を選択できる教室を開設しています。

北海道発祥のパークゴルフは春から降雪前まで町内いたるところで楽しめる上、冬には野球場の雪上にコースを作り一年中楽しめたり、町内のスキー場や屋内外のスケートリンクではスピードスケートやアイスホッケーを楽しむことができ、初心者から世界を目指す選手までが利用しています。

文化面の事業も多く定期的に開催されるコンサートや講演会といったスローライフの材料も整えています。

暮らしやすさや魅力を伝える努力

永く住むには教育や子育て、健康づくりから福祉に至るまでの環境が大変重要な要素となります。

移住相談等については、まちづくり推進課をワンストップ窓口として、問合せや相談には全て対応する体制、姿勢で臨んでいます。

移住希望者の関心の高い項目を盛り込み、わかりやすく作成された「移住ガイド」には実際に移住者の声を取り入れるなど、町の魅力を紹介するアイテムも用意しています。

まちづくり推進課の取組には今までに経験した多様なお客様ニーズに対応しようとする考えが取り入れられています。

町内に不動産業者が少ないため、不動産情報のリサーチや近隣市のハウスメーカーへ営業訪問を行うことや、移住促進住宅（ラクラク住宅）として状態の良い経年住宅をリニューアルして格安な家賃の物件などを用意するなどの取組も行っています。

紹介された事業以外でも新規就農や新規起業、企業誘致などいろいろな部署との連携で定住化策を進めています。

定住化促進対策のこれから

「おためし暮らし」体験を平成19年度から実施してきて、体験者数や滞在日数としては延びている状況です。(表1参照)

しかし、すぐには「移住・定住」には結びついていない事も現実で「将来の移住候補地として…」の成果にとどまっています。

日本全体で人口減となっている現状のなか、安平町はこれからも、民間活力の導入などによる宅地整備をはじめ、人口確保策や少子化対策等の新しい施策事業を盛り込みながら事業を実施してきています。また、平成23～25年度の3ヵ年事業として、民間アパート建設助成を実施し、町外への流出を抑制、町内への移住・転入における居住先の確保を目的に人口確保策も進めています。

しかし、全国的な問題と同様に、都市部への人口流出や一極集中化、少子高齢化といった問題が顕著となっています。平成21年度については、町の対策により社会増減等において一定の歯止めをかけることができましたが総体数ではマイナスとなっています。

町の最重点課題の「定住化施策・

◀移住ガイド

表１　移住体験者実績

年度	体験数	日数	体験者居住地
H19	5組	39日	東京都・京都府
H20	7組	94日	愛媛県・徳島県
H21	7組	155日	神奈川県・愛知県・長崎県
H22	6組	206日	東京都・埼玉県・千葉県
H23	5組	109日	神奈川県・兵庫県・大阪府
H24	7組	151日	東京都・愛知県・宮崎県

人口確保施策」は、子育て・教育・福祉・介護等いろいろな分野の連携が重要であり、定住希望者や移住希望者のニーズも高まる中での整理が更に必要となってくると考えています。

地域資源の活用

安平町内の多くのゴルフ場、日本競馬界で活躍する競走馬を育てている牧場などに、年間40万人ほどの観光入込客数があります。

反面、地理的にも恵まれた場所は観光的には通過型の町になっていてこれらのお客様の目をどのように町内に向けるかも大きな課題です。

町の名産品としては、高級ブランドの「アサヒメロン」やチーズ発祥の地でもある「カマンベールチーズ」などがありますが、観光面の知名度を上げていく取組が大きな成果に結びつくような知恵も必要と考えます。

夢が現実！全国、そして世界へ 雪だるま小包みについて

北海道民にとっては、邪魔なものとして扱われる「雪」を活用した取組として、「雪だるま小包」があります。

旧早来町時代の郵便局長が発案し、「北海道では雪は邪魔もの扱いだが、本州では雪は喜ばれるもの」と全国へ真っ白な雪を届けることで町をＰＲしようと考えたのが発端で、雪だるま型の発砲スチロール容器に新雪を詰め込み、「雪だるま小包」として全国へ「雪だるま」を発送しています。

１９８６年に試行錯誤、悪戦苦闘でスタートしてから今年（２０１０年）で25年、その人気は全国に届けられています。

２００８年２月、安平町から２ｍ（重さ1トン）の「巨大雪だるま」を地球の反対側、南米ブラジルへ届ける奇想天外な企画に成功しました。

もちろん「雪だるま小包」も届けましたが、実際に雪に触れる機会のないブラジルの方々は子供も大人も雪に触って目を輝かせていました。

日本では冬の2月、でも現地ブラジルは真夏のサンパウロカーニバルの季節。

苦労が実り無事に数時間の企画の間、溶けることなく最後まで巨大雪だるまは形をとどめていました。

町はこの「雪だるま」を地域資源として特別住民登録を行っています。

早来雪だるま郵便局の局舎の屋上には雪だるま型のモニュメントがあり、地域特産として欠かせない存在である雪だるまの功績をたたえ、ゆうパック開始20周年を記念し、平成17年12月に特別住民として登録し毎年住民票の限定発行を行っています。

地元のキャラクターやアニメの人気者などが特別住民として登録されることはありますが、当時、建造物としてはこの「早来雪だるま」が日本で初めてのことでした。

今年も全国に向けて雪だるま小包の発送は始まっています。

更に平成22年度には本州方面からのクルージングツアーのオプショナルツアーに、安平町にて「雪だるま」づくり体験の採用が決まり、観光面においても交流人口を増やす大きな役割を担っています。

安平町長　瀧　孝

（平成22年12月20日付第２７４３号）

▶雪の詰め込み作業が終わり発送を待つ雪だるま

▶日本人ブラジル移民100周年に贈られた雪だるま

▶特別住民登録表

◀早来雪だるま郵便局